

平成 21 年度英国リプロダクティブ・ヘルスならびに地域保健研修報告

大西真由美¹・中尾理恵子¹・川崎 涼子¹・大石 和代¹

保健学研究 22(2): 71-77, 2010

(2010年3月24日受付)
(2010年6月25日受理)

はじめに

長崎大学医学部保健学科看護学専攻に平成 21 年度入学の学部生から、国際看護学実習を選択科目として単位認定するにあたり、実習プログラムの整備を進めているところである(表1)。

これまで保健学科では、韓国・晋州保健大学との交流協定に基づく学生と教員の交流、米国・カウアイコミュニティカレッジとの交流、フィリピンにおける研修といった海外フィールドでの研修機会ならびに先方学生および教員の受入を通して経験を積み重ねてきた。しかしながら、正規の単位認定科目としての取扱はしない形で実施してきた。

一方、平成 21 年度のカリキュラム改正により、「統合分野」において教授する内容のひとつとして「国際社会における看護師としての協力」が明記された。それに伴い、これまでの海外フィールドでの研修ならびに受入による交流プログラムを、単位認定科目として取り扱うために、その内容やフィールドならびに交流先について検討し、実習科目として整備する必要性が出てきた。

その一環として、今回、平成 22 年 3 月 5 日 - 11 日に、

英国におけるリプロダクティブ・ヘルスならびに地域保健学に係る研修プログラムを実施したので報告する。尚、今回は正規の単位認定実習科目の取り扱いをしていないことから、本プログラムを「英国研修」と表記する。

1. 英国研修準備

平成 21 年 3 月に、英国における助産ケアを中心に学ぶ研修プログラムを試行的に実施した。助産学専攻の学生中、参加を希望する学生 5 名(3 年生: 3 人, 4 年生: 2 人)が参加したが、助産学専攻以外の学生からも英国研修への希望者があったため、参加者を看護学専攻を中心に保健学科全体から募り、継続して実施することを前提に、実習受入施設ならびにその担当者との定期的な連絡を取り合った。

平成 21 年度から、新年度オリエンテーションにおいて、英国研修を含む海外における研修プログラム実施予定について、学生にプログラム概要を説明するようにし、早期から動機づけをすると共に、参加希望者は経済的な準備を進めることを提案した。また、大凡の参加希望プログラムならびに人数を把握するために、4 月末日まで

表 1. 国際看護学実習プログラム案

| 研修地(国) | 受入/派遣 | 研修内容 | 実施時期・期間 | 科目名 (単位認定対象学年) |
|-------------------|-------|--|---------------------------|--|
| カウアイ (ハワイ, 米国) | 受入 | カウアイ・コミュニティ・カレッジとの交流プログラム、カウアイ・コミュニティ・カレッジ学生との交流を通して、異なる文化・社会におけるコミュニケーション、保健医療システムについて学ぶ。 | 隔年、3月下旬または5月。 | 国際看護学実習Ⅰ (1 - 4 年生) |
| | 派遣 | | 隔年、夏季休暇中(1 週間~10 日程度) | 国際看護学実習Ⅱ (3 - 4 年生) ※1-2 年生も参加可能 |
| 晋州(韓国) | 受入 | 晋州保健大学との交流プログラム、晋州保健大学学生とのホームステイ等を通して、異なる文化・社会におけるコミュニケーション、保健医療システムについて学ぶ。 | 6月~7月(3泊4日) | 国際看護学実習Ⅰ (1 - 4 年生) |
| | 派遣 | | 夏季休暇中(3泊4日) | 国際看護学実習Ⅱ (3 - 4 年生) ※1-2 年生も参加可能 |
| ロンドン、 リーズ(英国) | 派遣 | 英国におけるリプロダクティブ・ヘルス、地域保健活動に係る講義・見学を通して、異なる文化・社会における保健活動について理解を深める。 | 3月上旬(1週間程度) | 国際看護学実習Ⅱ (3 - 4 年生) |
| コロール (パラオ) | 派遣 | パラオにおける病院/保健センター等の保健医療施設見学、伝統文化ならびに人々の生活体験を通して、異なる文化・社会におけるコミュニケーション、保健医療サービスと人々の生活について理解を深める。 | 夏季休暇中(1週間~10日程度) | 国際看護学実習Ⅲ (3 - 4 年生) |
| マニラ (フィリピン) | 派遣 | フィリピン大学看護学部、サンラザロ病院、国立母子病院、フィリピン総合病院、マザーテレサの家等における講義、実習を通して、熱帯病ならびに異なる文化・社会におけるケアについて理解を深める。 | 2月中旬~3月中旬頃 (1週間~10日程度) | 国際看護学実習Ⅲ (3 - 4 年生) |

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

に、英国研修を含む海外における研修プログラム参加希望について、国際看護学実習担当教員まで連絡するように指示した。この時点では、英国研修には3人の参加希望があった。

平成21年度は、新型インフルエンザの流行のため、国内外の情報収集を行ないながら、海外における研修プログラムの実施の可否を慎重に検討した。平成21年10月に、本研修の実施を決定し、本格的な調整を開始した(表2)。また、英国研修を含む海外でのフィールド研修等に係る危機管理として、長崎大学「国際交流(学生の海外派遣・留学生受入)に伴う危機管理対応マニュアル」に加えて、保健学科内における「国際看護学実習等における事故・不測事態への対応」を整備した。

平成21年12月7日に、今回は看護学専攻の学生のみならず、理学療法学専攻ならびに作業療法学専攻の学生にも参加希望があれば対応する旨を学内掲示にてアナウンスした。更に、保健学科教員に対しても、引率およびファカルティ・デベロップメント(FD)と

して参加希望を募り、協力を呼びかけた。平成22年1月15日を参加申込締切とした。締切日までに、看護学専攻学生6人(内、助産学専攻学生:2人)と看護学専攻教員3人の参加希望があった。尚、今回の研修旅行の航空券、宿泊、現地専用車、英国内移動鉄道切符の手配は、現地事情に詳しい旅行社を通して行ない、研修施設ならびに受入担当者との調整は国際看護学実習担当教員が行なった。国際看護学実習担当教員のネットワークを活用し、ロンドンでの研修は、英国在住日本人助産師ならびにロンドン・スクール Hygiene & Tropical Medicine 博士課程在籍中の日本人学生に、リーズでの研修は、リーズ大学大学院修士課程在籍中日本人学生(保健師)ならびに英国国教会牧師でありホスピス等のチャプレンも務める英国在住日本人女性に研修アレンジと通訳を依頼した。

参加希望学生の内3人は海外渡航経験無、2人は有効期限内パスポートを所有していなかったため、パスポート取得について指導・助言を行なった。平成22年2月

表2. 英国研修準備

| 日付 | 連絡調整 | 準備内容 |
|-----------|--------------------------------------|--|
| H21.12.02 | | 英国研修プログラム(案)を作成。 |
| H21.12.03 | 英国研修プログラム(案)に基づいて、研修受入先、担当者に連絡を開始。 | |
| H21.12.07 | | 看護学専攻学生(3-4年生)に英国研修参加希望者募集案内をメール・リストにて発信。同様の内容を学内に掲示。保健学科教員にも同様の案内を発信。 |
| H21.12.07 | 旅行社に、航空券、宿泊の仮予約依頼。 | |
| H22.01.15 | 参加希望締切。研修受入施設、担当者で詳細日程調整。旅行社との詳細打合せ。 | 事前オリエンテーション用資料準備。 |
| H22.02.03 | 研修受入施設に対し、受入依頼文書を送付。 | |
| H22.02.04 | | 参加者に対し、事前オリエンテーションを実施。 |

表3. 事前オリエンテーション

| 旅行社 | 国際看護学実習担当教員 |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 日程 2) 平成22年3月5日(出発日) 集合時間・場所 3) 宿泊先 4) 英国通貨・両替 5) 英国の気候 6) 英国の治安 7) 海外旅行保険 8) 研修旅行代金 <p>【配布資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 出発前のご案内 ● 日程表 ● ホテル information ● ホテル周辺地図 ● 海外旅行保険加入申込書(加入は任意) ● その他 | <ol style="list-style-type: none"> 1) 研修参加「承諾書」について 2) 研修中の安全管理 3) 研修中の健康管理ならびに新型インフルエンザに関する対応 4) 事前学習内容(英国の歴史・文化・社会, NHS:National Health Servicesを含む保健医療システム, 出産ケア, ジョン・スノウ, 海外安全情報, 他) <p>【配布資料】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 長崎大学「国際交流(学生の海外派遣・留学生受入)に伴う危機管理対応マニュアル」 ● 保健学科「国際看護学実習等における事故・不測事態への対応」 ● 英国研修中の新型インフルエンザ対策 ● ロンドンにおいて日本人医師が診察を行なうクリニック一覧 ● 事前学習資料(英国の保健医療制度ならびに出産ケア, ジョン・スノウ) <ol style="list-style-type: none"> (1) 近藤克則, 他. イギリスにおける医療の質評価の動向. JIM. 15(3):232-236, 2005. (2) 平岡公一. イギリスの項連射保健福祉サービスの動向-ブレア政権下での政策展開-. 保健の科学. 47(8):559-565, 2005. (3) 白瀬由美香. イギリスにおける地域保健サービスの形成. 大原社会問題研究所雑誌. 586・587:34-46, 2007. (4) 小澤淳子. 英国における助産師のガイドライン. 助産師. 62(1):72-74, 2008. (5) 小澤淳子. 特集:世界の助産師からの学び-イギリスの助産技術の発達とそれを支えるもの-. 助産師. 62(4):20-23, 2008. (6) その他関係資料 |

4日に、参加希望者に対し、事前オリエンテーションを行なった。事前オリエンテーション内容は、旅行社による研修旅行スケジュールと一般的な海外渡航に関する注意事項等と、国際看護学実習担当教員による長崎大学海外渡航危機管理ならびに研修参加事前学習に関する内容によって構成された(表3)。また、この時に、参加希望学生に対し、英国研修参加にあたり学生本人と保護者宛の英国研修説明書と参加「承諾書」を配布し、「承諾書」に学生本人と保護者の署名・捺印の上、平成22年2月19日までに提出することとした。更に、研修後に提出する課題レポートについて説明を行なった。

また、参加学生は、事前に保健学科学務係に海外渡航申請手続きを行なった。

研修参加費用は、参加者の自己負担とした。研修参加費用に含まれるものは、航空券、宿泊費(朝食付)、ロンドン到着日の夕食と出発日の昼食、ロンドン-リーズ列車乗車券・指定券、ロンドンとリーズ市内移動用専用車両借上である。通訳謝金は、国際看護学実習担当教員が持つ適用可能な研究費から支払った。

尚、保護者からの承諾書には、研修参加にあたり、海外旅行保険に加入することを前提とする旨を記載し、学生は各自で任意の海外旅行保険に加入した。加入済であることを証明するコピーを提出してもらった。また、入学時に加入を勧奨している学生総合共済保険ならびに学生賠償責任保険等への加入状況についても確認した。

1 英国研修の実際

1) 全体の行程(表4)

基本的に研修時間外ならびに3月6日(土)午後の時間は自由行動とした。

毎朝、決められた時間に専用車がホテルに迎えに来て移動するため、観光地ではない場所へも迷うことなく到着することができた。

ロンドンでの宿泊場所は、ロンドン・スクールや地下鉄の駅(ラッセル・スクエア)にも近く、学生たちが食事や飲み物等を購入できるスーパーマーケットも近くにあり便利であった。

研修前半は英語でのコミュニケーションにも躊躇していたようだが、後半には英語で質問する等、積極的な態度が見られ、自信もついたようだった。

2) ロンドン・スクール Hygiene & Tropical Medicine ならびにジョン・スノウの井戸

視察日は土曜日であったため、講義風景等は見学できなかったが、案内役のロンドン・スクール博士課程学生より、ロンドン・スクールの歴史の概説、図書館およびキャンパス案内をしていただいた。また、リプロダクティブ・ヘルスならびに人口学分野の調査研究についてディスカッションを行なった。

同学生の案内により、ロンドン・スクールから、徒歩でソーホーにあるジョン・スノウの井戸を訪ね、「ジョン・スノウ・パブ」にて昼食を取りながら、ジョン・スノウの公衆衛生学への貢献についてディ

表4. 平成21年度英国研修プログラム

| 日時 | 研修施設・場所 | 研修内容 |
|----------|---|---|
| 3月5日(金) | | 移動(長崎→福岡国際空港→ソウル→ロンドン) |
| 3月6日(土) | 午前 ロンドン・スクール Hygiene and Tropical Medicine | ロンドン・スクールの歴史、教育・研究、図書館資料・史料等について学ぶ。リプロダクティブ・ヘルス調査研究に関するディスカッション。 |
| | 午後 ジョン・スノウの井戸 | ジョン・スノウの井戸を訪ね、ジョン・スノウの公衆衛生学への貢献について学ぶ。 |
| 3月7日(日) | 午前 | 移動(ロンドン→リーズ) |
| | 午後 サックレイ医療博物館 | 英国における公衆衛生、保健医療の発展の歴史を学ぶ。 |
| 3月8日(月) | 午前 Sue Ryder Care (ホスピス) | 英国におけるホスピス・ケア(コミュニティ・ホスピス含)について学ぶ。 |
| | 午後 Feel Good Factor Leeds - Healthy Living Center (健康推進活動を展開するNPO) | 民間団体によるコミュニティ・ヘルス活動の実際、National Health Service (NHS) との関係について学ぶ。 移動(リーズ→ロンドン) |
| 3月9日(火) | 午前 Wellcome museum | 医学・製薬を含む科学の歴史について学ぶ。 |
| | 午後 St. Mary's Hospital (NHS 病院) 産科病棟ならびに院内マタニティ・クリニック(院内助産院) St. Mary's Hospital 内 性感染症クリニック | 英国における出産ケア、リプロダクティブ・ヘルス・ケア、Vulnerable people へのアプローチについて、NHS の観点から学ぶ。 性感染症クリニックの役割と機能、Vulnerable people へのアプローチについて学ぶ。 |
| 3月10日(水) | 午前 | ロンドン文化視察 大英図書館、大英博物館、他 |
| | 午後 | |
| 3月11日(木) | 夜 | 移動(ロンドン→ソウル→福岡→長崎) |
| | 夜 | 長崎到着 |

スカッションした。

ロンドン・スクールでは、様々な公開講座を実施しており、ジョン・スノウに関する講義と井戸の訪問を組み合わせた講座も人気講座のひとつであるが、今回の滞在中には開催されなかったため、上記の通り独自に企画した。ロンドン・スクールでは、ジョン・スノウ講座以外にも、熱帯医学ならびに国際保健に関する講座を実施しているため、都合がつけば参加可能である (<http://www.lshtm.ac.uk/events/>)。

3) サックレイ医療博物館

(<http://www.thackraymuseum.org/>)

ジョン・スノウの時代の庶民の生活の様子や居住・衛生環境、細菌やウイルスの発見とワクチンの開発、麻酔と外科手術の発展の歴史等が紹介されており、ジョン・スノウの疫学者としての側面と麻酔科医としての側面を両方学ぶことができた。庶民の生活の様子のコナーでは、当時、病気の原因とされた“ミアスマ（瘴気）”の匂い付で紹介されており、英国らしいマニアックな博物館であった。

4) Sue Ryder Care Wheatfields Hospice

(<http://www.suerydercare.org/wheatfieldshospice/>)

施設内ホスピスとコミュニティ・ホスピス（訪問ホスピス）、デイ・ホスピス（通所ホスピス）の機能を持つ。いずれも医師、看護師、保健師、理学療法士、作業療法士、カウンセラー、チャプレン等、チームでケアにあたる。対象者の居住地区のGP（general practitioner）との連携もされている。施設内にスタッフの顔写真が貼ってあったが、保健医療従事者も調理担当者、清掃担当者等の非保健医療従事者も同じスタッフの一員であるという考え方にに基づき、区別なく紹介されていた。また、ケアの充実のために多くの地域ボランティアが活動していた。

施設内ホスピス、コミュニティ・ホスピスのどちらでケアを受けるかについては、患者本人の病状や希望によって、両方を柔軟に使い分けていた。利用者のほとんどは白人の英国人である。

5) Feel Good Factor Leeds – Healthy Living Center

(<http://www.fgfleeds.org/>)

英国では、医療の供給は基本的に National Health Services (NHS) によって行なわれるが、予防活動・健康推進活動は、本団体のような民間団体が大きな役割を担っている。本団体は、リーズ市内の中でもカリブ系住民や中国系住民が多く居住する比較的貧しい階層の地域で、生活習慣病予防に取り組んでいる。活動資金は、行政機関、財団等からプロジェクト資金として得ながら、地域に根差した活動を実施していた。

6) Wellcome Museum

(<http://www.wellcomecollection.org/>)

Wellcome Trust（医学研究支援等を目的とする財団）のコレクション展示をした博物館であり、医学史に係る資料・史料が豊富である。

7) St. Mary's Hospital

(<http://www.imperial.nhs.uk/stmarys/>)

1984年生に設立されたロンドンにおけるNHSの中核総合病院のひとつであり、インペリアル・カレッジ・ロンドン医学部の教育研究病院として機能している。

産科病棟と、同じ病院内にあるマタニティ・クリニック（院内助産院）を視察した。いずれもNICE (National Institute for Health and Clinical Excellence) ガイドラインに沿って全国统一基準によるケアを提供している。またどちらにも水中出産用の設備が設けられていたが、助産師の裁量によって出産ケアを提供できるマタニティ・クリニックの方が、より家庭的で温かい印象を与える環境になっていた。

現在、英国では、妊産婦死亡とVulnerable conditions（社会的疎外、社会的不利条件）との関連について注目されており、妊娠中・出産後の女性に対するドメスティック・バイオレンス、自殺、うつ等の予防対策が講じられている。Vulnerable conditionsに置かれている女性達は、経済的貧困や移民といった社会的リスクを抱えており、このような女性達のケアに専門的に携わる助産師もいる。

同病院に併設されている性感染症クリニックでは、HIVを含む性感染症の検査・治療にあたっており、性暴力被害者への対応も行なっている。同クリニックにおいてHIV以外の性感染症に関して陽性の結果が出た場合、当該の陽性者から同意を得た上で性的パートナーの連絡先を聴取し、クリニックからパートナーに対して受検勧奨通知を郵送している。その際、陽性者の氏名や通知送付の理由等は明記せず、不特定多数への受検勧奨を装う内容で通知している。

2 参加学生の意見・感想

参加学生には、A4版2ページ以上5ページ以内の事後レポートを課し、全員から期日までに提出があった。レポート課題は「英国研修に参加しての学び」とし、必要に応じてサブタイトルをつけても良いこととした。

レポート内容から英国研修に対する感想・評価部分について、要約を表5に示す。

助産学専攻の学生は、出産ケアに関する見学・研修について特に興味深く参加しており、事後レポートに日・英のケアの違いについて詳細に記述していた学生もいた。一方、ホスピスでの見学・研修につ

いては、全ての学生が刺激を受けた様子が記述されていた。今回の参加学生は、日本ではホスピスでの実習経験がなかったため、初めてのホスピス訪問であり、患者の希望を尊重してホスピスで馬を飼ったり、コミュニティ住民らがボランティアで手工芸の講師を務めたり資金確保のための活動を行なうなどのエピソードには、全ての学生が感銘を受けていた。また、ジョン・スノウの井戸の見学については、講義で学んだ場所に実際に行くことで、より関心が高まったことが記述されていた。

研修参加に関して否定的な記述はみられず、「視野が広がった」、「文化や価値観が違う国のことに関心を持てた」、「日本のことにより関心を持てた」といった肯定的な意見ばかりであった。

3 参加教員の意見・感想

「ジョン・スノウの井戸」は現在もピカデリー・サーカス近くのロンドン市街地に、レプリカであるが存在している。ジョン・スノウ・パブには、スノウの功績に関係する写真等が展示されており、また窓からはちょうどスノウの井戸が見え、人通りの多さ、入り組んだ路地を眺めながら、このような市街地で700人以上もの死者を出したコレラについて、患者発生場所をマッピングし、伝染病が人から感染する「悪魔」ではなくこの井戸が感染源であったと特定したスノウの功績を振り返る場となっている。学生は3年前期の「地域看護学概論」でスノウについて学んでいるが、レプリカであっても実際の場所で井戸のポンプを触ることによって、スノウの功績を想起できたと思う。また、この経験のあとでもう一度公衆衛生について学ぶ機会があれば、さらに公衆衛生への興味が深まるのではないかと考える。

NHSについては英国国内でも賛否両論あるようだったが、今回の研修で出会った医療従事者、保健福祉従事者すべて、自国のNHSという制度についてよく理解した上で、賛成反対のみならず現政府の方針への意見を持ち、政府方針が自分の働く分野にどのように影響し、自分もまたそのシステムの一部であることを自覚していた。自国の保健医療制度について、個々のサービスだけではなく、その全体像や変化について、自分を含め保健医療従事者すべて、また、学生も敏感であるべきだと痛感した。

地域保健において、保健医療システムが人々の健康に与える影響は重要な要素であるが、国内でのシステムだけを見ていたのではその重要性がわからないことがあり、他国の状況と比較して検討できることは意義が大きいと考える。また、異なる保健医療システムの下での人々の暮らしの実際を理解できたことで、学生の保健に関する視野を広げることができたと思う。それらシステムができた背景に歴史

や文化が影響していることが今回の研修では体験できるようにになっていたため非常に興味深かった。

今回、ナイチンゲール博物館には改修中のため訪れることはできなかったが、ナショナルギャラリー前のナイチンゲール像を見ることができた。ロンドンには多くの人物の像があったが、やはり、ナイチンゲールには最も親しみを感じた。昨年の英国研修では、ナイチンゲール博物館を訪れ、学生も関心が高かった訪問場所であったので、来年はリニューアルされた博物館見学を研修プログラムに取り入れたい。

4 評価と今後の課題

今年度は、新型インフルエンザ流行の関係で、正規の実習科目や入試日程にも影響があったため、本研修プログラムの実施日程を当初予定の7泊8日で組むことができず、6泊7日のプログラムとした。研修日が昨年度の試行プログラムに比べて1日少なくなったことで、自由行動の時間がほとんどなくなり、タイト・スケジュールになってしまった。内容的には、リプロダクティブ・ヘルスと地域保健に関して様々な角度から、また歴史的な時間軸という点からも充実したものになったが、海外渡航に不慣れた学生の疲労や適応状況を考慮し、研修日程や内容を検討していく必要がある。

3年次の学生は研修直前まで正規の実習があり、事前に英国の歴史・文化や保健医療システムについて学習する時間を十分に確保することができなかった。日本の保健医療システムとの比較の上でイギリスのシステムを理解したり、英国と日本の看護教育制度の違いを理解した上で出産ケアについて学ぶことができればより深い学習につながったと考える。しかしながら、学生たちは英国の実際のマタニティ・クリニックにおける看護やホスピス等施設での患者ケアの現場に接し、ケアの多様性を学ぶことができていた。また、国際的な場で活躍している専門職者とのディスカッションは、専門職としての自信をもつための積極的な学習の必要性など学びの大きい経験であったと思われる。日本の保健医療システムや看護教育制度については、今回の参加学生は部分的に既習しているが、研修参加前に、系統的に学ぶ機会が必要であった。

保険加入に関しては、英国研修では、直接患者ケアに携わる場面はなく、安全管理上特に注意を必要とする研修内容は含まれていなかったため、通常の海外旅行保険で対応することとしたが、今後、研修の場や内容によっては、国内外での事故等に対応可能な「学研災付帯学生生活総合保険」または「生協・学生総合共済&学生賠償責任保険」への加入を義務付けることを検討する必要がある。また、他大学で

は、途上国研修の際には、CGS（海外危機管理会社 <http://www.wph-hq.com/japan/educational/point.html>）への加入を義務付けているところもあり、同様のプログラムを実施している大学と情報交換しながら、万全を期すように検討したい。

正規の授業科目に影響がないように研修日程調整をすること、また事前学習の時間を確保すること、

安全管理は、今後とも課題となる。研修プログラムに参加することで、学生は世界観が広がり、得るものは大きいですが、一方で日頃の学習の積み重ねと系統的な事前学習によって、より効果的に研修を展開することが可能となるので、本研修の一層の充実を図っていきたい。

表 5. 参加学生の事後レポートからの研修に対する意見・感想

| 項目 | 意見・感想 |
|-------|---|
| 研修内容 | <ul style="list-style-type: none"> • 今まで日本についてしか考えていなかったが、英国でも同様に、人々の健康のために工夫された制度や活動が行なわれていることが理解でき、視野が広がった。 • 研修中に「死という大事な、後々まで家族の中に残り続ける場面に携わることは大変ではあるが、その時間を貴重な時間だと思えるように支援する仕事を誇りに思う。悲しいという感情だけではなく、楽しいとも思える」という終末期ケアに携わる看護職の素晴らしさを実感した。 • 国や制度が異なると、出産ケアの内容や助産師の役割も異なってくることが理解できた。 • 文化や考え方の違いはあるが、どの国でも看護師として「その人が望む暮らしの提供」をするという考え方は共通していることが理解できた。 • これからも他国の医療制度や価値観について理解を深めていきたい。 • 日本以外の国の保健医療制度にも関心が高まる一方、日本の保健医療についても今まで以上に興味を持つことができるようになった。 • 英国以外の国の保健医療事情についても関心が高まった。 |
| 文化・社会 | <ul style="list-style-type: none"> • 初めての海外旅行で、日本以外の文化に触れることが新鮮だった。 • 海外での安全管理についても学ぶ機会となり、有意義だった。 • 英国のフレンドリーで気さくな人達と接し、日本人とは異なる人間関係の作り方が興味深かった。一方、日本の相手の行動を良く見て行動する“悟りの文化”の素晴らしさもあらためて認識した。 • 見るもの、聞くもの、自分で話すこと、全てが刺激的だった。 |

Reproductive health and public health study tour in the UK

Mayumi OHNISHI¹, Rieko NAKAO¹, Ryoko KAWASAKI¹, kazuyo OISHI¹

1 Department of Nursing, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 24 March 2010

Accepted 25 June 2010